

「慢性疲労症候群」(Chronic Fatigue Syndrome ; CFS) について

関西福祉科学大学 倉恒弘彦

【概要】

慢性疲労症候群 (Chronic Fatigue Syndrome; CFS) とは、健康に生活していた人が風邪などに罹患したことがきっかけとなり、それ以降原因不明の強い全身倦怠感とともに、微熱、頭痛、筋肉痛、思考力の低下、抑うつ、不安などが長期に続いて健全な生活が送れなくなるという病態であり、CDC (米国疾病対策センター) により 1988 年に提唱された比較的新しい疾患概念である。

【患者数】

1999 年の厚生労働省研究班 (班長: 木谷照夫、大阪大学医学部) による疫学調査 (名古屋地区 4000 名を対象、有効回答数 3015) では一般地域住民の約 0.3% が CFS に該当していた。2004 年の文部科学省研究班 (代表研究者: 渡辺恭良、大阪市立大学) による疫学調査 (大阪地区の一般地域住民を対象、有効回答数 2742) でも約 0.3% が CFS に該当しており、日本における 15-65 歳の CFS 患者数は約 24 万人と推定される。

【症状】

慢性的な疲労感とともに、発熱、リンパ節腫大、咽頭痛などの感染症様症状、頭痛、筋肉痛、関節痛、脱力感などの膠原病様症状、睡眠障害、思考力低下、抑うつ、不安などの精神・神経症様症状などの多彩な症状が認められる。

【原因】

種々の生活環境ストレスによって引き起こされた神経・内分泌・免疫系の変調に基づく病態であり、免疫力の低下に伴って種々のウイルスの再活性化が惹起され、これを制御するために産生されたインターフェロン (IFN) などのサイトカインが脳・神経系の機能障害を生じていると思われる。

【治療】

確実に有効な治療法は確立していないが、以下の治療法が試みられる。

抗酸化療法 (ビタミン C 大量、CoQ10 など) 免疫賦活療法 (漢方薬など) 向精神薬 (SSRI、抗うつ薬、抗不安薬など) 精神療法 (認知行動療法)

日本における CFS と XMRV との関係について

関西福祉科学大学 倉恒弘彦

目的：昨年より米国で問題になってきた CFS と XMRV 感染症との関係を日本においても明らかにするため、以下の検討を行った。

対象：大阪市立大学医学部疲労クリニカルセンターに通院中の CFS 患者 100 名
(木谷研究班 CFS 診断基準、CDC の CFS 診断基準を満たす患者)

方法：

1. 抗体検査：XMRV のウイルス粒子(タンパク質)を抗原として、検体中の抗体の有無をイムノブロットング法により解析した。
2. DNA 検査：末梢血単核球から DNA を抽出し、XMRV DNA の有無を genomic-PCR 法により解析した。
3. 上記解析は、京都大学ウイルス研究所の 2 カ所の研究部門(宮沢先生、小柳先生)、大阪府赤十字血液センター研究部(古田先生)の 3 カ所に血液検体を送付して実施した。

結果：

1. CFS 患者において XMRV の Gag カプシド蛋白に対する抗体が 100 例中 2 名に認められたが(陽性率 2.0%)、健常者 500 名の陽性率 1.6%と比較して有意な差は認めなかった。また、その他のウイルス蛋白に対する抗体は認められなかった。
2. XMRV DNA については、上記 PCR 解析で陽性例は認めなかった。

結論：

現時点の調査結果からは、日本においての CFS と XMRV 感染症との関係は認めなかった。しかし、今回用いた検査法の感度を高めると検出される可能性も否定できないため、引き続き調査研究を行う必要がある。